遠くて近い信仰者（２）イサク　　**創世記 26:17～33**

遠くて近い信仰者ということで第一回目の先週は信仰の父アブラハムに学びました。特にアブラハムが主なる神様から一人子なるイサクを全焼のいけにえとして捧げなさいという命令を受け、それに従います。寸前のところで主は「手をその子に下してはならない。あなたの神への献身のほどがよく分かった」と言われ、全焼のいけにえのための雄羊を用意してくださったという場面を見ました。ここではアブラハムにスポットライトが当てられています。アブラハムの信仰、アブラハムの全き献身者としての姿が大きくクローズアップされています。まさに「信仰の父」としての姿です。そしてその子イサクはアブラハムの姿を際立たせる脇役の立場にあります。しかし今朝はイサクに焦点を当てて、神様のみ心を探ってゆきたいと思います。

１．「わたし」の神 と わたしの「神」

父親のアブラハムがイサクをささげようとした時、彼は父親の言うがままに従っています。イサクはたきぎを背負って父親と一緒に山を登ることができるほどの年齢になっていましたから、自分を縛りあげ、刀を振り下ろす父親に十分に抵抗することができたはずです。しかし、イサクは、父親に何の抵抗もせず父親に服従しています。なぜそのように彼は行動したのでしょうか？　彼の頭の中は思考停止状態でまるでロボットのようにアブラハムの言いなりになったということでしょうか？父親が刀を振り下ろそうとしていることに恐怖をおぼえなかったのでしょうか？　私は人間であるなら当然、怖かったと思います。今の時代なら完全に児童虐待ですよね。特に信頼していた親からそのような目に合わされたわけですから不信感、裏切られた思いで相当心傷ついたことと思います。時々、信仰者は自分の側からだけ考えて、相手に何が伝わっているかに気が付かないことがあります。私の信仰のための相手なのか相手の信仰のために私がいるのか。ですからアブラハムの信仰だけを取り上げて、めでたしめでたしというわけには行きません。特に父アブラハムと子イサクとの間は聖書を見てゆくとあまり会話がありません。

しかしだからこそ、イサクがアブラハムの言うことに素直に従ったということに大きな驚きを覚えます。イサクという名前の意味は「彼は笑う」です。何か明るい性格で健康的なイメージのする名前のようですが、「笑い」とはアブラハムとサラに神様から子供が生まれることが告げられた時に彼らがそんなことはありえないと笑ったことから来ています。つまり神に対して冷ややかで皮肉な笑いです。言わば本気で神様を信じていない、不信仰の表現としての笑いです。しかし、神様が告げられたとおりイサクが生まれました。アブラハムと妻サラは大きな喜びと共に自分達が神様のみわざを軽く考えていたことに大いに悔い改める思いが起こったことと思います。ですからイサクの名を呼ぶ時にはいつもアブラハムは神のみわざに対する驚きと感謝、そして自分自身の神に対する不信仰さを思ったことと思います。

この後の彼らの歩みを見てゆきますと人間的に考えたらもっとも自分が信頼し、自分を愛してくれていると思っていた父親から、真実が隠され、そして大きな裏切りともいうべき仕打ちに会ったわけですから親子関係が崩れてもおかしくはないのですがそうなっていません。これはアブラハムの立派さがイサクに伝わったということでは無いように思います。むしろ父親が自らの弱さと足りなさを認めながらもなお神の憐みを求めて従っていこうとするその信仰の姿を通してイサクは主なる神を見出したのではないでしょうか？　「わたし」の神ではなくわたしの「神」なのです。

２．まことの柔和

さて今日の箇所ですがイサクも妻リベカと夫婦となり、エサウとヤコブの二人の息子を設け、その息子が成長した時のことが記されています。ここにはイサクの柔和な姿が描かれています。少し前にペリシテ人たちは、アブラハムが掘った井戸を埋め、イサクを追い出しました。出て行ってくれと（12～16 節）、

その時イサクは彼らと争うことなく引き下がっていますし、せっかく掘った井戸も彼らに渡しています（17～22 節）。お人好しと言おうか、気が弱いといおうかイサクの柔和な性質が表れています。

では、イサクはまわりの言うがままになる気が弱くて、弱々しい人だったのかと言うとそうではありません。実は、彼は芯の強い人でした。イサクのしもべたちとゲラルの羊飼いたちとの間に争いがあった時、イサクは、自分のしもべたちを引き下がらせていますが、これはリーダシップがなければできないことです。争いをあおるのは簡単ですが、血気盛んなしもべたちを納得させるのは並大抵のことではありません。また、イサクを追い出したペリシテの王アビメレクがやってきた時には、「なぜ、あなたがたは私のところに来たのですか。あなたがたは私を憎んで、あなたがたのところから私を追い出したのに。」（27 節）と、言うべきことをはっきりと言っています。ですからイサクは強さをもった柔和な人と言えます。

イサクばかりでなく、神を信じる者たちには、強さと柔和さが求められています。山上の説教でイエス様は「義に飢え渇いている者は幸いです。」「心のきよい者は幸いです。」「平和をつくる者は幸いです。」「義のために迫害されている者は幸いです。」と言われました。正義を追求してやまない勇気、まわりがどんなであってもそれに迎合しないで自分をきよく保つ純粋な心、争いの中に平和をつくり出していく創造的な力、迫害にも屈しない強い心を、イエス様は私たちに求めておられるのです。しかし、だからと言ってクリスチャンは、仰々しく正義をふりかざしたり、自己を主張したり、自分たちのイデオロギーを押し付けたり、歯を食いしばってやせ我慢をする者たちではありません。イエス様が「心の貧しい者は幸いです。」「悲しむ者は幸いです。」「柔和な者は幸いです。」「あわれみ深い者は幸いです。」と言われたように、クリスチャンは自分の弱さを知る心貧しい人、自分の罪を悲しむ人、自己主張をせず、神のみこころと他の人のしあわせを願う柔和な人、人の痛みを感じ取ることができるあわれみ深い人であることが求められているのです。

しかし、どのようにしたら、イエス様が求める柔和を持つことができるのでしょうか。理不尽なこと、自分勝手に振舞う人が多い現実の中で、柔和であることは簡単なことではありません。どんなに気をつけ、努力していても、私たちの心は、さまざまなことで乱されて、柔和さなどどこかに行ってしまうことが多いのではないでしょうか。どこに行ったら、柔和な者になれるのでしょうか。それはイエス様のもとに行くことです。イエス様はこう言われました。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」マタイ 11:28-29 と言われました。口語訳では「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。」となっています。イエス様ご自身が「わたしは柔和である」と言っておられるのはとても不思議な気がしませんか。私たちがこんな言い方をしたら、イヤミにしか聞こえないでしょう。柔和な時もあれば、とげとげしい時もあり、親切な時もあれば、不機嫌な時もある、私たちは常に柔和ではないし、いつも変わらず親切ではないからです。しかし、イエス様は、どこまで行っても柔和なお方です。イエス様は柔和そのもののお方です。私たちに「柔和な者であれ」と求めておられるイエス様ご自身が、「柔和」そのものであり、私たちに柔和を与えてくださるというのです。イエス様は、私たちに出来ないことを求められることはありません。イエス様は、私たちに何かをするように求められる時、かならず、それを行う力も備えてくださっているのです。柔和もまた、イエス様のもとにあり、イエス様から受けるのです。

３．自分の役目に生きる

ヘブル人への手紙を見ると「信仰によって、イサクは未来のことについて、ヤコブとエサウを祝福しま

した。」ヘブル 11:20 とあります。この前に長々と信仰者アブラハムの姿が記されていますがイサク自身に関してはこの一節のみです。イサクは、偉大な父アブラハムの影に隠れて目立たない人だったかもしれません。しかし、彼の柔和な信仰は報われて、アブラハムに与えられた祝福を次の世代に引き継ぐという大切な役割を果たしているのです。イサクは息子のヤコブとエサウを祝福しました。そして次の世代へと信仰が受け継がれて行きましたと淡々と書かれていますがそれは神様の憐みがなければ成り立たないことでした。特にイサクは年老いてあまり目が見えないという時に、弟ヤコブが悪知恵を働かせて長男つまりエサウが受けるはずの祝福を自分のものとしたのです。ヤコブは問題ですがエサウもまたその前に長子の特権という特別な祝福を受ける権利を軽く考えてスープ、煮物と交換するということをしています。父からの祝福をめぐって出し抜かれたエサウは激怒しヤコブを殺してやるとまで言い出します。まさに骨肉の争いです。結局ヤコブはそこにいることは出来ずに流浪の旅に出ます。親のイサクとしては子どもが兄弟同士で憎しみ合っている姿を見、しかもそこに自分のミスも加わっているということでずいぶん心痛めたことと思います。その後エサウとヤコブが良い関係に戻るまで 20 年以上もの時間を要することになりました。イサクはこの時、およそ 100 歳でした。二人が仲直りする感動的な場面は創世記 33:3,4 に「ヤコブ自身は、彼らの先に立って進んだ。彼は、兄に近づくまで、七回も地に伏しておじぎをした。エサウは彼を迎えに走って来て、彼をいだき、首に抱きついて口づけし、ふたりは泣いた。」とあります。信仰によってイサクは未来のことについてとあるように今の現実ではなく、やがて信仰をもって祈る者に与えてくださる未来を信じて渦中にある者の祝福を祈り続けたのです。

今まで何度か話をさせていただきましたがかつて東京の神学校で学んでいる時に退職したので時間があるからと聴講生として学びに来ていた方がおられました。近くの教会で長い間役員をされていました。その方はずっと祈っていることがありました。それは息子さんがいるのですが教会やクリスチャンに対して非常に批判的で伝道できていないということでした。ある時からガンを患われて聴講には来られなくなりました。ペインコントロールがあまり効かないようで痛みが襲ってきましたがその方は戦中派と言おうか我慢をされる忍耐力のある方でした。特に息子さんに対しては痛みで弱々しい姿を見せるとそれこそ伝道どころか大きなつまづきを与えるということで出来るだけ平静を保ったふりをされていました。息子さんがお見舞いに来たある時にあまりの痛みに「痛い、苦しい」と声を上げられたというのです。そして痛みが少し治まって息子さんが帰った時に奥様に「ああ、こんなぶざまな姿を見たら、あいつが信仰を持つことなんて難しくなったな」と寂しげにおっしゃっていたというのです。しかし葬儀の後、その息子さんは教会に行くようになり、洗礼を受けてクリスチャンとなりました。彼はこう言ったというのです。「神様を信じている親父でさえ、あんなに苦しい目にあうとしたら、自分は罰としてどんなに苦しい目にあうだろうか。それを思うと怖くなって教会に行きたくなった」と言うのです。その方は自分の信じている神様をちゃんと息子さんに伝えていたんだなと思うのです。

神は私たち一人一人を神様ご自身を、イエス様ご自身を伝える者として用いようとされています。私たちの賜物や良さを通して、時には私たちの弱さや罪深さを通しても神を証しする者として用いようとされているのです。そのために必要なことは何でしょうか？　イサクのあの柔和で従順な信仰者としての歩みです。またアブラハムの一徹な神への信仰と「恥はわがもの、栄えは主のもの」の信仰です。